MCN経営漫談コラム 「三々な経営」シリーズ E-36

先達の遺訓⑥江原素六先生（教育者）

企業経営漫談士 岡野実空

「遊ぶ学園」の別名で知られ、やたら自由な麻布中学・高校。その創立者・江原素六先生は、江戸・明治・大正を生きた教育者だけでなく、実業家、政治家としても知る人ぞ知る存在。先日、卒業後50年を経て、その遺業の地・沼津の「江原素六記念館」を学友と訪ね、遅まきながら多々感ずるところがありました。今回のコラムはその中から、企業ミドルの皆さんに役立つコンセプトを、「個人」「組織」そして「戦略」の3つの視点で報告させていただきます。

個人：克己制欲

師の座右の銘は、「克己制欲」。己にかち、意志の力で、自分の衝動・感情・欲望などを抑える。特に、「制欲」。言うは易く、行うは難いことはつねづね体感済み。また40代ともなれば、生理的欲求の大半は下降を始めますが、悪いことに色欲など一部は落ちず、逆に金銭や出世など、別の欲の増殖が始まります。特にカネや名誉などは、際限がないだけ質が悪く、それを追うあまり、師とは対照的に、晩節を汚した例は枚挙に暇がありません。

「自制」や「自己犠牲」が苦手な方には、座禅や巡礼などがお薦めですが、最も手軽にできるのは、トイレで鏡に映る自分の姿を眺め、「みっともないことしていない？」と（無言で）自問自答すること。その意味で、役員の部屋や会議室に大きな鏡を設置するのは、企業ガバナンスの一環でもあります。

組織：玉石混淆

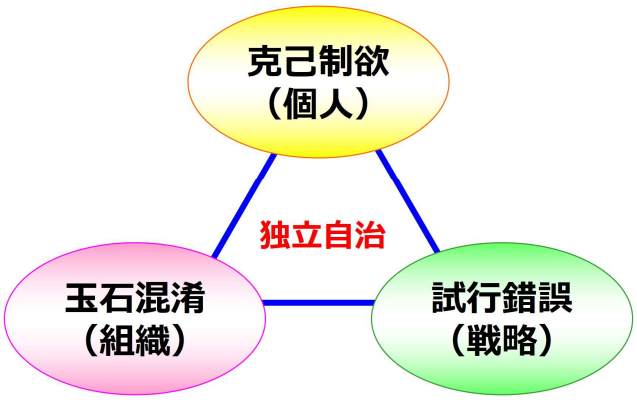
麻布卒業の実業人の代表は、旧国鉄総裁だった故・石田礼助氏ですが、私が最も尊敬するのは、財界鞍馬天狗といわれた旧日本興業銀行頭取の故・中山素平氏。神出鬼没の氏は、人材起用の名手としても知られましたが、そのコンセプトは、江原先生から学んだ「玉石混淆」。頭がよく、同じタイプの人間ばかり集めても、好ましい結果は出ないということ。それどころか往々にして、足の引っ張り合いなど、真逆のおぞましいことが起きかねません。

いま多くの大企業で起きているように、「正解」を「効率的」に解くことに長けた均一な人間を大量に採用し、入社式でトップが「多様性」を訓示するという有様は、教育者の師から見れば、悪い冗談でしかないでしょう。

戦略：試行錯誤

廃藩置県後、多くの旧幕臣が東京に移る中で、師は沼津に残り、職を求めて逆に移住してきた仲間のために、牧畜、製紙、茶の輸出など多くの産業を興しました。また、官林に編入された愛鷹山の払下げに政治家となって奔走し、これらが現在の沼津の産業の礎となったのです。

E-36 先達の遺訓⑥江原素六先生



しかしその過程は、「七転び八起き」。見事なほど、失敗の連続。そこから多くを学び、社会に有用な人材の資質や能力をつかんだことが、その後の教育者としての名声につながりました。国や企業の歴史を見ても、「驕り」を身につけた勝者より、負けた方が、そこから多くを学び、教訓を引き出して、その後の発展に結びつけています。

このコラムでもすでに何度か書きましたが、いまのように変化が大きく、過去の経験が役立たない時代の戦略の基本は、「試行錯誤」。アイデアを思いついたら、まずは小規模で試み、「失敗という学習」を繰り返すうちに得た知識やノウハウで、最終的な成功をつかむというプロセスです。

以上のような「思考」は、すべて「独立自治」の志が起点。師の時代からいまだに続く、官公庁や巨大産業にぶら下がる「下請意識」からは何も生まれません。その意味で、師が尊敬していた福澤諭吉翁と同じく、「私立」の精神こそが、「学」だけでなく、我が国の「実業」の再活性化をもたらす要諦であることを、改めて実感した一日でもありました。

平成30年2月5日 実空

©NPO マネジメント共育ネットワーク